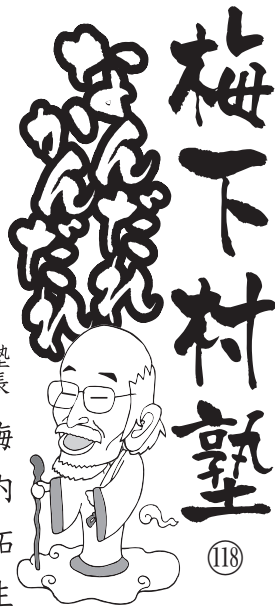


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

（情報の氾濫と秩序の創造）

インターネット時代に生きている現在、洪水のごとく流れ来る情報と、泡のようにすぐに消える情報の氾濫。いわば、現代社会は混沌を呈しているということが言える。それは、第2次世界大戦後の米ソの二大強国による支配体制の終焉ももたらした混沌への過程を引きずっているのである。

3・11の東日本大震災から復興への第一歩を踏み出した気仙地方は、地球環境、人口、貧困、格差、政治、経済など21世紀の地球文明が抱えている、難問への挑戦を始める立場にあると思うことが、第一歩である。いわば、世界や国内の中心からはずれた所に、新しい創造のエネルギがわいて来ると考えれば、気仙地方はまさ

にこれに当たるものとならずに思う。

コンピュータサイエンスを駆使した情報理論も、カオス（混沌）の辺縁に新しい秩序が生まれるといっていることからもうなずけるわけである。この思いを大船渡短歌会7月例会作品評で「へその緒のつながり」として述べた。

文字を残さなかった縄文化は気仙地方に深く根付いている。数万年前に地球上の東西南北からの文化が流れきて、交じり合っ

市を含む旧気仙郡にも多くの神社仏閣がある。経文への親しみは草の根に根付いていると思う。これら、日々親しんでいる経文が、世界の歴史、科学、経済、政治に響き合うことをおもえば、大船渡短歌会例会作品評の意図するところが感じられるものと思う。

「子は親に孝行を行い、親は老いたら子に従う」、素晴らしい知恵ですね！まさに般若心経に言われている「知恵」です。日々の生活から生み出した知恵を詠み、子孫に伝え、受け継ぎ、世界にメッセージとして発信することが旧気仙郡の「老と若」に期待されております。

（東海新報記事から）

7月22日（月）の第2面に「情熱と志を経営に 未来創造塾生を募集 大船渡市など」が掲載されている。大船渡市などは、8月に開講する「東北未来創造イニシアティブ大船渡人材育成道場・未来創造塾」の塾生を、気仙2市1町から募っている。経営者、リーダーとしての資質を磨

うとしての講座で、若手企業家の参加を呼びかける。」と報道されている。気仙地方の若手の企業家の育成プロジェクトは地元にとって極めて重要なことであり、活発な活動を期待している。

同じ紙面の気仙坂には「謙さんと青い目の人形」が掲載されている。第2次世界大戦中の軍部による鬼畜英米教育の最中に、青い目の人形を隠しておくことは難しいことだったと思う。女教師であった謙さんが、青い目のお人形には罪がないと言って捨てずに隠しておいたお話は胸に響くものがある。

盛町も、艦砲射撃のため金石製鉄所の上空を越えて気仙まで飛んできて機銃掃射を受けてきた。その合間に4歳くらいの少年だった自分が権現堂橋のコンクリートの欄干をくぐりながら、猪川小学校の女教師だった母の乳が出にくかったので、妹のために川向かいに牛乳を買に行った。

梅下村塾110に掲載。戦争は大きな悲劇を生む。「謙さんと青い目の人形」はこの悲劇を避けるために大切な話である。

「情熱と志を経営に 未来創造塾生を募集 大船渡市など」と「謙さんと青い目の人形」の話をつなげれば、気仙を越えて世界に発信できる記事になる。

（地域文化と子孫への心遣いを詠む）

8月16日の世迷言には8月15日の終戦記念日の新聞各紙の「敗戦特集」について述べている。

1945年の太平洋戦争での敗戦からほぼ60年、敗戦への思いと評価はいろいろ変わってきている。世迷言は戦後教育を支配してきた自虐史観では21世紀の文明世界の中で、日本が生きていけないと述べている。日本の自虐史観に乗って、日本を攻め続けてきている中国や韓国も、自国内で発生している政治、経済、民族問題など自国政府への矛盾の波をかぶって、戦後歴史の評価に変化がみられてきている。

8月21日の第1面には「町民と果敢な挑戦を」多田町長が所信表明 住田町議会臨時会 予算案3件を承認、可決」という記事が掲載されている。

多田町長は江戸時代の米沢十五万石に九州宮崎の高鍋藩から養子となって財政が逼迫していた米沢藩を立ちあげさせた上杉鷹山の言葉「国家人民のために立ちたる国家人民にはこれなく候」を取り上げ、「私が目指す『町民主体のまちづくり』に共通するもの。『町民にとっていいことは、行政、国家にとってもいいこと』。今こそ町民とともに果敢な挑戦が必要であると考えている」と、町民との対話を大切にしながら町政課題に挑む姿勢を見せた」と述べている。

この「地域文化と子孫への心遣い」は21世紀の文明への大きなメッセージであり、住田町から日本を越え、世界の国々へ発信されるものとなることを肝に銘じなければならぬ。